

# オランダ教育見聞録

## －イエナプランの小学校を視察して－

岩野 翼

京都教育大学大学院 gluckliche\_tage\_verleben@yahoo.co.jp

キーワード：オランダ，イエナプラン，ワールドオリエンテーション

（受付：2010年1月22日）

### Ⅰ. はじめに

2009年3月、京都教育大学理学科の村上忠幸教授らと共にオランダへ赴く機会を得た。そこでの主な目的は、現地の小学校を訪問することであった。学校訪問では、現地在住の教育研究家として知られるリヒテルズ直子氏と行動を共にし、授業の様子や、児童・教員からの様々な話をうかがった。このオランダ訪問の概要を筆者の捉えた視点で報告する。

### Ⅱ. オランダの教育

#### 1. 教育の多様性

オランダの教育システムの特長のひとつに、オールタナティブ教育がある。長い間行われてきた一斉授業に代わる別の教育を意味し、様々な教育思想家によって確立された（リヒテルズ，2004）。かつてはオランダも日本と同じように、一斉授業を行っていたが、60年代末以降の教育改革を経て、現在は学校ごとに様々な教育を実践している。2007年3月現在の初等・中等学校数の種類は、多い順に、ダルトン教育、イエナプラン教育、モンテッソーリ教育、シュタイナー教育、フレイネ教育がある。これらの教育は総じて「個性」を重視する。それはオランダの市民性とも深く関係している。従来型の一斉授業教育を含め、どの教育スタイルの学校を選ぶかは、子どもや保護者が自ら選択する（リヒテルズ，2008）。

#### 2. イエナプラン教育の実際

2009年3月16日、Barendrechtにあるイエナプラン校 Dr. Schaepman School（小学校）を訪れた。イエナプラン教育の特長は、リヒテルズ（2006）によると次の3点があげられる。

- ①異年齢混合学級
- ②教科ではなく活動の型による時間割
- ③ワールドオリエンテーション

以下、筆者が実際に現地で確認したものについて示す。

##### 1) 靴下を自分で編むような気持ち

「靴下を自分で編むような気持ちで、学校や児童と向き合っているのです。」校長先生の

言葉である。「靴下を自分で編むような気持ち」とは「一つひとつ丁寧に」という意味であると思われる。この小学校では特に、互いに属し合っているという帰属意識を、教員、児童が共に持つ。ここに重点を置いているのだという。

昼食時はサンドウィッチを片手に笑いながら、午前中の出来事、教える中で困ったこと等を教員同士が自由に意見交換する。この間、保護者が交替で児童たちを見るのが一般的だ。それにより、保護者も一緒に子どもたちを育てているという意識が芽生えるからだという。Dr. Schaepman School では保護者の他にも、教員が1人見回っているようである。

## 2) No pictures!

筆者がある教室で、7～8歳の児童の活動の様子を撮影しようとカメラを向けると、“No pictures!”という女児が何人かいた。担任の教員に聞くと、「子どもたちは皆、子どもニュースで性犯罪のことを知っているのです。インターネットに載せられるのではないかと思います子もいるはずですから。」とのことであった。子どもニュースとは、成人向けのニューストピックとはほぼ同じ内容を、子どもにも分かるように易しく伝えているようだ。どの小学校でも児童への視聴を薦めているテレビ番組の一つのようである。

## 3) 4～6歳の児童

教科ではなく「話す」という活動の時間がある(図1)。この時間では、土日にあったことを児童が皆に説明する。ペンギンのぬいぐるみを持つ児童が話し、それを聞く児童が、人差し指を1本立てれば「発言がある」、ジャンケンのグーのサインが「質問」だ。

「話す」という授業が本当に成り立つのだろうかと不安に思っていたが、児童たちは話し手の方を向き、静かに、ニコニコと楽しそうに聞くのである。それは、発言や質問をする児童が大勢いたことや、その様子からもよく分かる。また、児童の活動の手順はあらかじめ壁に掲示されており、内容は絵で示す等、工夫されていた。1週間の時間割も児童自らが立てるのである(リヒテルズ, 2008)。



図1 「話す」という活動時間におけるサークル対話の様子

## 4) 10～12歳の児童

黒板付近には、長方形の小さな椅子が半円形に配置されており(図2)、そこに数人の児童が座り、教科書の内容についての説明を受けていた。黒板では教員が算数の掛け算について説明し(図3)、その他の児童は各自の机で白地図に色を塗ったり、各国の生産物に関わるグラフを作成したり、それに関わる数値や通貨の計算をしたり、単位変換の学習をしたりと、日本では社会や算数などと様々な教科に分かれるはずである事柄を、世界のことを知るという1つの目的のもとで行っていた(イエナプラン教育のワールドオリエンテー

ションの要素)。

なお、各自が課題をこなす中で、分からないことは教室に設置されている学習資料のコーナーで自由に調べることができる(図4)。ここにはパソコンも設置しておりインターネットが使えるよう配慮されている(図5)。また、積極的に児童同士が教え合い、学び合う姿が見られた。さらに、進度は児童によって異なり、早く課題を終えた児童は、次の課題に移ることが許されている。さらに、必ず座っていなければならないということはなく、床に座って足を伸ばしながら学習する児童も見受けられた。これも認められている。日本では考えられない光景であるが、これでも児童は静かに各自の課題をこなしているのである。

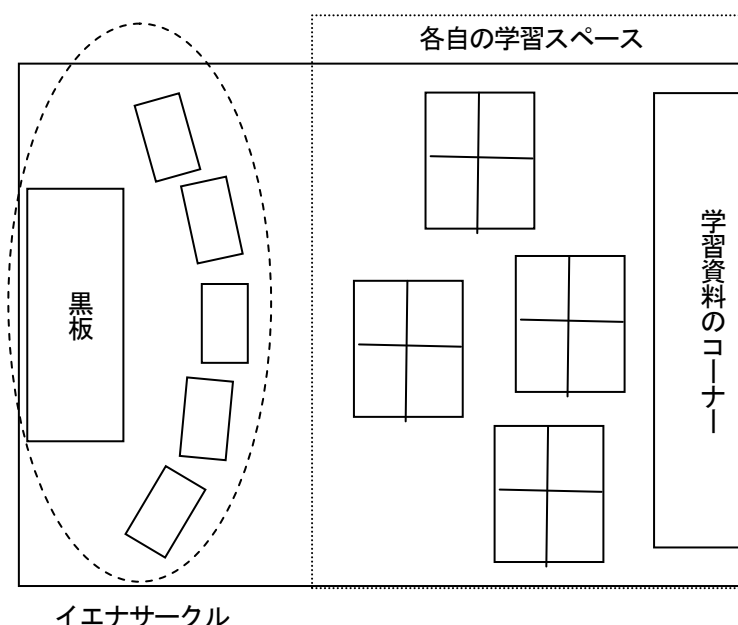


図2 ある教室の配置図

## 5) 催し

午後になると児童たちがホール集まった(図6)。午後は児童らも疲れているため、活気付ける目的で、このように「催し」、「遊び」、「ワールドオリエンテーション」を行なうことが多いようである。本時は「春」をテーマに、復活祭のこと、春に見られる身の回りの事物等を児童に質問することから始まった。児童たちも好きな体勢で催し物に参加していた。校長先生が登場し、「今回、みんなに新しい仲間を紹介するわ。さあ、こちらは誰かしら？」とサッカーボール程の大きさの、丸い、オレンジ色の物体を見せることからワールドオリエンテーションが始まった。これから1ヶ月間、オレンジの物体を使い、鶏の卵を温めて育てたり、チューリップ等の植物を育てたりする。こうした、「春」に触れる活動を通して、温度計や湿度計の使い方を学ぶのである。これに関してリヒテルズ氏は、「こういった活動を通して算数や理科等の学習の意味を考える機会を与える目的があるのですよ。」と話していた。

児童たちはこの後、それぞれの教室に戻り活動を続けた。

#### 6) 7～9 歳の児童

このクラスでは“花”についての学習を行っていた。バラやチューリップの花から、オランダの地形、輸出入の状況、競の様子まで、児童たちが調べたことをレポートにまとめ、黒板のポスター等も使って報告し合う（図 7）。輪になっている児童の脇にいるのは、児童の保護者である。1 人はある児童の祖父、1 人はまた別の児童の母親である。児童たちの様子を見守りながら、ときどき人差し指を一本立てて意見する場面も見られた。児童の発言を批判したり褒めたりするわけではなく、立場の違いを感じさせない発言内容であった。昔の農業の様子、海外でのバラの活用法等、児童らが知らないことを紹介していた。最後に感想を求められた保護者の「私も知らないことが知れて良かった。たくさん勉強になったよ。ありがとう。」という言葉が特に印象に残っている。児童と共に学ぶ一人なのだという意識が感じられた。全体を通して、教員も保護者も常にポジティブな発言をしていたように思う。子どもがもっと学びたいと思えるような、そんな場を提供したいという願いの表れなのだろうか。

イエナプラン校では、保護者の学校活動への参加が積極的で、学校は、教員と保護者とが協力して子どもの養育・教育にあたる場であるという考えだという。

#### 7) 親子面談

図 8 は、7～9 歳のクラスの親子面談の様子である。両親、担任、児童で話す光景は写真で見ると一見、日本と同じようにも見える。しかし、実際には大きく違う。

日本では教員が保護者と話している間、児童はそれを横で聞くのが一般的である。しかし、ここでは話す割合が、児童 7 割、担任 2 割、両親 1 割といった具合で、児童が中心となって話す。担任が子どもに質問し、児童がファイルやノートを持ってきて、見せながら説明する。「授業中にこの絵を描いたんだよ」とか「こういう勉強をしてきたよ」といった具合である。

もちろん、担任が両親に質問することもあったが、担任が児童に、父親が児童に、母親が児童にといったように、常に児童が主体なのである。後で話を伺ったところ、担任と両親とで、児童に対する質問のリストを予め作っておき、それに基づいて進行していたようである。

#### 8) オランダの教育に学ぶこと

オランダの教育の実際を見て、また現場の教員の話聞く中、学んだことは、次の 2 点である。

まず、現実世界を学ぶという意識を強いという点。教科に分けることは学問を究める上で効率も良いであろう。しかし、それによって見えなくなりがちな実社会と学習との距離はどうだろうか。時事問題を子どもたちに学ばせたいというオランダの社会的土台や、ワールドオリエンテーション、活動による科目編成等、実社会や実生活の中に学びがあるのだということを実践するオランダの教育現場から、日本の教育が学ぶべきことがあるのではないだろうか。



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8

図 3 黒板を使って説明する教員，図 4 学習資料のコーナーで本を探す児童，図 5 教室の設置されたパソコン，図 6 司会をする教員と話を聞く児童たち，図 7 輪になり，調べた事を発表する児童，図 8 親子面談の様子

もう一つは，親子面談にせよ，授業中にせよ，主人公は子どもたちであるということ。子どもたちが育つ手助けをするのが教員であり，保護者なのである。「勉強とは教えてもらうものではなく，学ぶものなのだ」「質問をするのは先生ではなく，児童の方である」という，「学び」の本来の姿をオランダで感じた。

学ぶという行為は、受験のためや、周りに言われるからするのではなく、自ら必要性を感じ、自らが進めるのが本来の姿ではないか。生きる力は実生活や現実の中で生かされてこそ、意味を持つ。オランダはまさにこのような「生きる力」を培う教育を実践している。その結果が、身を乗り出して学習する子どもたちの生き生きとした姿や、たくさんの笑顔に表れているのではないだろうか。

### Ⅲ. おわりに

仮に、日本にオランダの教育スタイルを導入すると、どのようなことが予想されるであろう。技術面だけを取り入れても、現在の日本の教育に順応しないのは明白である。これは児童・生徒、さらには学校・教育に対する社会の意識が完全に異なるからである。そういった社会的基盤から変わらなければ難しい。

「日本の教育を良くしたい。」これは筆者も含めて日本の教育に携わる者全てに共通する思いであろう。しかし、日本だけを視野に入れて議論するのは不十分ではなかろうか。海外における教育の様々なスタイルや考え方を知り、それを技術面だけ取り入れるのではなく、もっと基礎的な部分を再構築する必要がある。教育の哲学的原理、社会の認識等様々な部分を全て変えていかなければ、おそらく根本的な変化は期待できないであろう。また、このようなことを実際に行うのも、現実的には非常に困難であり、数ヶ月や数年でかなうようなものでもない。オランダ訪問を通して、筆者はそのような問題を再認識した。

### 文献

- リヒテルズ直子 2004. オランダの教育 - 多様性がひとりの子供を育てる. 平凡社, 238pp. 東京.
- リヒテルズ直子 2006. オランダの個別指導はなぜ成功したか - イエナプランに学ぶ. 平凡社, 238pp. 東京.
- リヒテルズ直子 2008. 残業ゼロ授業料ゼロで豊かな国 オランダ 日本と何が違うのか. 光文社, 270pp. 東京.